

多摩森林科学園における環境教育林づくりの試行

井上真理子・大石康彦・赤間亮夫・伊東宏樹・井上大成・桂田ひとし・田村典子・岩本宏二郎・井春夫 (森林総研多摩)

要旨：森林環境教育や木育を広め、森林や林業、木材について多くの人に知ってもらうには、森林が教育的な活動の場となることが重要であるが、普及や教育活動に役立つ森林のあり方はまだ十分に検討されていない。そこで、樹木園などの研究施設の一部を一般に公開し、環境教育林づくりを試行している多摩森林科学園を事例に、環境教育林づくりの経緯と取り組みの内容を整理した。多摩森林科学園における環境教育林づくりは、一般の人々の森林への関心や教育的利用への要望を背景に、普及・広報活動として展開されてきた。取り組みの内容には、森林の整備や展示館などのハード面の整備、利用者の活用のための管理業務、利用者への対応といったソフト面での対応があり、さらに情報提供、教育的な活用への工夫、展示やガイドの工夫が挙げられる。さらに今後は、環境教育林づくりの取り組みを、環境教育や森林教育としての視点から検討し、教育的な利用のための森林のあり方を検討してゆく必要がある。

キーワード：環境教育林、環境教育、森林環境教育、森林教育、樹木園

I はじめに

地球環境問題の解決が世界的な課題となっている今日、環境教育や ESD (Education for Sustainable Development) の推進が求められている。国土の約 7 割が森林である日本で、森林は環境に占める割合が高い。貴重な自然環境であり、再生産可能な自然資源である森林は、一般の人々への森林や木材に対する理解を求める環境教育の場としての役割も期待されている。そのため林野庁は、森林環境教育や木育により、森林や林業、木材について多くの人に知ってもらうための取り組みを実施している。

森林に関する教育的な活動は、実践活動が先行する一方で、教育的な利用のための森林のあり方は検討されていない。今後、森林の教育的な利用の推進を図るには、森林の整備や運営方法を含め総合的に体系化する必要がある。

ところで、森林総合研究所多摩森林科学園では、研究施設の一部である樹木園とサクラ保存林、展示施設を一般に公開し、「環境教育林」づくりに取り組んでいる。広く一般向けに森林について学ぶ場としての実践事例は、教育的な活動のための森林のあり方を検討する手がかりとなると考える。そこで本研究では、多摩森林科学園の「環境教育林」づくりの取り組みについて整理した。

II 方法および対象

1. 研究方法 多摩森林科学園での「環境教育林」づくりに関わる歴史的経緯と、取り組みの内容について整理した。歴史的な事項は、年報などの関係資料をもとにした(注)。

これらの結果をもとに、教育的な活動の場としての森林のあり方について考察した。なお筆者らは、アクションリサーチとして、「環境教育林」の取り組みに参画している。

2. 本研究での環境教育林の定義 森林に関する教育の用語は複数あるが(1)、「環境教育林」は、定義された用語ではない。「森林環境教育」は、林業白書(平成 14 年版)で「森林内での様々な体験活動等を通じて、人々の生活や環境と森林との関係について理解と関心を深める」こととしており、広く一般の人々を対象とした森林や木材に関する普及や教育と捉えられることが多い。そこで本研究では、「環境教育林」を、広く子ども達や一般の人々を対象に、「環境教育や森林教育のための利用に役立つ森林、または教育的な活用としての森林」とし、森林での体験活動の場と捉えた。また、森林での体験活動には、森林以外にも指導者やプログラムなどが必要である(2)。そこで「環境教育林づくり」は、ハード面、ソフト面を含め、森林での教育活動を支える総合的な運営体制を含めた取り組みと捉えることとした。

3. 多摩森林科学園の概要 調査対象である多摩森林科学園(面積 56ha)は、森林総合研究所の支所の 1 つで、東京の西部(八王子市)に位置する。大正 10 (1921) 年、宮内省帝室林野管理局林業試験場として設立され、戦後の林政統一により農林水産省林業試験場に統合され、昭和 63 (1988) 年に多摩森林科学園に改称され、現在に至っている。都心から 50km、高尾駅より徒歩 10 分の交通の便の良い場所にあり、標高は 183~287m のなだらかな地形で、周囲を住宅地に囲まれた中に残る森林となっている。

樹木園(7ha)には、林業樹種を中心に約 620 種、約 6,000 本の樹木があり、サクラ保存林(8ha)には、約 1,500 本のサクラがある。シイ、カシなど暖温帯常緑広葉樹林を中心とした天然林は、野生生物のすみかになっている。

Mariko INOUE, Yasuhiko OISHI, Yoshio AKAMA, Hiroki ITO, Takenari INOUE, Hitoshi KATSURADA, Noriko TAMURA, Koujiro IWAMOTO and Haruo I. (Tama Forest Science Garden. For. and Forest Prod. Res. Inst., 1833-81 Todor, Hachioji, Tokyo 193-0843) The case study about forest management for environmental education in Tama Forest Science Garden.

一般公開は、研修展示館（森の科学館：木造2階建て、914m²）と樹木園、サクラ保存林で、1年を通じて実施している（休園日：月曜等、料金：大人300円、小・中・高校生50円、桜の時期のみ100円増）。利用者数は、年間約6万人である（58,462人、2007年度実績）。

III 結果

1. 環境教育林づくりに至る経緯 多摩森林科学園は、試験研究施設として設置されながら、当初より、設置場所が多摩御陵や高尾山に近いことから、一般の人々の保健休養地や、普及活動の場として適する場所としての視点でも捉えられていた。時代の要請に応えた研究を推進し、研究室としては、樹木研究室（昭和33年～平成13年）、天敵微生物研究室（昭和42年～53年）、樹芸研究室（昭和53年～63年）が設置された。昭和41（1966）年には、農林水産省の桜遺伝子保存事業として、サクラ保存林が設置された。これらのサクラが成長すると共に公開への要請が高まり、サクラの開花期の休日に公開をするようになった。

1年を通じた一般公開に至った背景には、サクラを中心に知名度が高まったこととや、都市住民の森林へのレクリエーションへの需要の高まりも挙げられる。昭和63（1988）年の森林総合研究所の組織改正に伴い、浅川実験林から名称変更し、普及広報業務を担う情報発信基地の位置づけがなされ、通年で一般公開（有料）が志向された。

一般公開の準備期間（平成元（1989）～3（1991）年）には、試験研究の森林を公開の場とするために、樹木園、見本林などの森林や歩道の整備が行われ、研修展示館が新設された。また、展示の整備や案内板の設置が行われた。さらに新たに、広報専門官と森林生物研究室が配置された。

一般公開当初（平成4（1992）～6（1994）年度）には、森林整備や利用者のための案内板やベンチの設置などのハード面の整備と、安全管理のための巡視などの管理業務が開始された。また、展示の整備と、講座（森林講座、森林教室）やガイドツアー（試験林案内）が実施され、技術相談やアンケートなど利用者への対応が行われた。平成7（1995）年度以降は、入園者数が横ばい、減少傾向になると共に、ハード面の整備は一段落し、森林の保育や施設のメンテナンス、安全管理業務や利用者への対応が継続的に実施された。また展示内容の充実が図られ、サクラの品種の展示（ドライフラワー、アクリル標本）、リーフレットの作成、解説パネルの設置（平成7年）が行われた。研究面では、平成6（1994）年度から教育をテーマとする課題が取り組まれた。

こうした一般公開での普及・広報活動と、それを支える研究面での取り組みが、環境教育林づくりにつながった。

2. 環境教育林づくりの取り組み 森林・林業基本法と森

林・林業基本計画の改定で、森林の教育的利用が位置づけられた平成13（2001）年には、研究所の独立行政法人化に伴う組織改編により、多摩森林科学園の2研究室（樹木、森林生物）が教育的資源研究グループに統合された。翌年の平成14（2002）年には、「環境教育林創設準備委員会」が設置された。そこでは、環境教育林創設の目的を、「環境保全（森林生態系の保全）の重要性を市民や子ども達に理解してもらおう実践の場」とし、環境教育の場としての都市近郊林の整備の必要性が挙げられた。その試験研究の場として、一般の人々を対象とした普及、広報の実績と公開フィールドを持つ多摩森林科学園が対象となった。

環境教育林での取り組みの内容には、ガイドブックの作成（平成16（2004）年）やホームページの改定（平成18（2006）年）などの情報提供の工夫や、学校教育への協力などの実践的な研究、イベントの開催（平成19（2007）年度～）、フィールドとつながりをもった館内展示の工夫（平成20（2008）年度～）⁽³⁾、研究成果を盛り込んだガイドの工夫（平成21（2009）年度）があった。これらは、研究の成果を取り入れてすすめられた。

IV まとめ

多摩森林科学園での「環境教育林」づくりは、一般の人々の森林への関心や教育的利用への要望を背景に、普及・広報活動の中から取り組まれてきたものであった。取り組み内容には、森林の整備や展示館などのハード面の整備、利用者の活用のための管理業務や利用者への対応といったソフト面での対応があり、さらに情報提供、教育的な活用、展示やガイドの工夫が挙げられた。今後さらに、環境教育や森林教育としての視点から検討し、教育的な利用のための森林のあり方を検討する必要がある。

引用文献

- (1) 井上真理子（2007）森林教育の軌跡. 森林科学 49 : 28～32.
- (2) 大石康彦（1998）森林体験の実践と可能性. (林業技術ハンドブック. 全国林業改良普及協会編, 1969pp., 全国林業改良普及協会, 東京). 305～316.
- (3) 大石康彦・井上真理子・岩本宏二郎（2009）樹木園におけるフィールド展示と解説—多摩森林科学園における事例から. 日本環境教育学会大会研究発表抄録集 20 : 215.

注 多摩森林科学園に関する資料

- 林業試験場浅川実験林（1980～1988）年報. 1～10.
森林総合研究所（2005a）百年の事績. 45～46.
森林総合研究所（2005b）百年のあゆみ. 191～199.
多摩森林科学園（2001）八十周年のあゆみ. 86pp.
多摩森林科学園（1989～2007）年報. 11～30.